＊テイカカズラ（定家葛）キョウチクトウ科

平成２２年４月 11 日

四季の森里山研究会
角田　猛雄

・常緑のつる植物で茎から気根を出し、木や岩に這い上がる。
・葉は対生し艶があり、葉茎を切ると白い乳液が出る。（有毒）
・花期：５月～６月　　花は５裂し、螺旋状に左にねじれて咲き
　　ジャスミンに似た芳香がある。
・果期：１０～１１月　　果実は細長く１５～２０ｃｍで二対でぶら下がり、
　　熟すと裂開し、先端に長毛のある細長い種子を風で飛ばす。
・生薬の絡石（らくせき）　　果実と茎葉を乾燥し、解熱及び滋養強壮に煎服する。
　　生葉は、すりつぶし切り傷に湿布。

幼い葉
（地面を這い回る）

花
（木に這い上がる）

果実
（長い袋果）

種子
（裂開し種子を飛ばす）

・名の由来：鎌倉時代初期の公家で歌人の藤原定家に由来する。
・（物語）

定家が思いを寄せていたのは後白河法皇の三女で女流歌人の式子内親王（のりこ）。しかし身分の違いからその思いを遂げられぬまま、内親王は独身のまま４９歳でこの世を去ってしまった。
定家は当時としては長生きし 80 歳で没した。
その後、定家の墓から見た事もない不思議な葛が生え、近くにあった内親王の墓に絡みつき、まるで抱きしめるように覆い尽くしてしまった。
内親王の霊は絡みついた葛が苦しくて、ある日、通りかかった旅の僧侶に苦しみを訴え、僧侶は読経をして墓を覆った葛を取り去り、内親王はやっと成仏できたと云われている。
それ以降、この不思議な葛は「テイカ（定家）カズラ」と呼ばれるようになった。
因みに、定家の墓は式子内親王の墓と共に、京都「般舟院」にある。

＊（これもテイカカズラ）

神代の時代、アマテラスオオミノカミが弟のスサノウノミコトの乱暴といたずらのため、天の岩戸に隠れてしまい、この世は疫病や災いが発生し暗黒の世界となってしまった。
これに困った神々が相談し、舞いの旨いアメノウズメノミコトが岩戸の外で「天の日影を、たすきにかけて、天のまさきを、かずらとして舞った。」・・賑やかな外の様子を見ようとアマテラスが岩戸を少し開けたところを、タジカラオノミコトが岩戸をこじ開けアマテラスを引き出し、この世が再び明るくなった。・・・と伝えられている。そしてアメノウズメが舞った時の「天の日影」とは、ヒカゲノカズラを云い。「天のまさき」とは、テイカカズラと云われている。

・下線の部分を解説すれば
「アメノウズメノミコトがヒカゲノカズラを身にまとい、テイカカズラを頭に飾り舞った。」と云うことである。

【手元資料 1】

（ヒカゲノカズラ）

・ しだ植物で、杉林の下や乾燥した林の下に生える。

・ 神事：奈良県の率川（イサガワ）神社の祭りでは巫女が頭に飾り舞を舞う。

・ 今日でも地方によっては、新年や祝いの席に飾っている。

・ 京都の高級料理店では、鮮魚の塩焼きや山菜料理の添え物として利用されている。

【手元資料 2】

ツ　タ（ブドウ科ツタ属）

・ 別名　：　ナツズタ・アマズラ・モミジズタ
・ つる性の落葉性木本
・ 葉は浅く三裂し、艶がある。
・ 巻きひげの吸盤で樹林、壁を這い上がる。
・ 夏に緑色の花、秋に黒っぽいブドウに似た実をつける。
・ 秋の紅葉も美しい。
・ 昔（平安時代）は、甘葛（あまずら）と呼び、早春につるを切り
樹液を煮詰め甘味料を作った。

・ 蔦紋（つたもん）（つたの葉・茎・花を図案化した日本の家紋の一種）
（蔦は、地上で繁殖する「草」と、空を自由に飛ぶ鳥との組合せで、
めでたい「紋」といえる。
・ ８代将軍　徳川吉宗が用いたことから広がり、松平家・藤堂家等
江戸時代は、上は大名から、下は花柳界の女性まで「葛紋」を用いた。
（つたが絡んで繁る様が馴染みの客と一生離れないことに掛け、芸奴などに用いられた。）

【手元資料 3】

キズタ（ウコギ科キヅタ属）

・別名：フユズタ（フユでも葉が繁っている）

・ 常緑のつる植物で茎から気根を出し、木や岩に這い上がる。

・ 葉は互生で艶がある。

・ 花期：１０月にヤツデのような花を。

・ 果期：翌年の冬から春にかけ黒く熟す。

・ 由来　：ぶどう科のツタに似ているが、木質の度が強いことから。

【手元資料 4】

シャガ（アヤメ科アヤメ属）

- 日本のアヤメ科の中では唯一の常緑で、中国原産の帰化植物。
- 根茎は短く横に這い、群落を形成する。
- 「単面葉」：一枚の葉が折り紙を折るように内側に折れ、表面がくっついてしまい外側はどちらも裏となる。

  ネギは、この部分が円筒形になってしまう。
- 「三倍体植物」：シャガ・ヒガンバナ・種なしスイカ
- 花は咲くが種子が出来ない。（花は一日花）

  普通の植物は「二倍体」（遺伝をつかさどる染色体を二組持っている。）
- シャガは三組の染色体を持ち、葉や花は大きくなるが、種子を旨く作ることが出来ない
- 四倍体と二倍体の植物を交雑することにより得られる。